

新編 國際貿易總論

町田 実 著

自 由 書 房

著者紹介

町田 実

1918年 埼玉県浦和市に生まれる。

1939年 早稲田大学専門部商科卒。1946年早稲田大学人文
科学研究所を経て、現在、早稲田大学商学部教授。
商学博士。貿易論、国際経済学専攻。

著書 社会経済学の基礎理論(前野書店)、国際貿易論(同)
国際貿易の史的構造(同)、世界市場論序説(多磨書店)
現代の国際貿易(中央経済社)

訳書 ルフラン「商業の歴史」(クセジュ文庫 白水社)
ジャーヴィス「現代企業の発展」(早大出版部)

現住所 浦和市針ヶ谷2-10-3

新編 国際貿易総論

定価 2,700円

昭和56年4月10日 初版発行

著者 町田 実

発行者 黒田 伝十郎

発行所 株式会社 自由書房

102 東京都千代田区富士見2-4-6

電話 東京(03)261-7417・7418

振替 東京6-152081

© 1981 信毎書籍印刷株式会社印刷・菊川製本株式会社製本

3063-300025-3226

改版によせて

本書の旧版を執筆していたころのことを思いだす。丁度そのころ、作家のきだみのる氏がわが家にやってきて『人生逃亡者の記録』を書いていた。毎日わたしと顔を合わせ「小生はこのところ能率が上がりすぎだ。君の方はどうかね」などと雑談しながらお茶を飲んだ。氏はわたしにとってフランス語の先生だったが、周知のようにファーブル『昆虫記』の訳者で、未開社会、原始心性の研究者としても知られていた。わたしはこの方面でも少なからず影響を受けたようだ。あるとき氏はわたしに「君の研究には *Jus Gentium* (万民法) の研究も必要だろうね」などといわれたことを、いまはなき氏の面影とともに、この頃不図思い出すのである。

おもえば、本書の旧版が出てからすでに9年の歳月が流れた。その間、改訂増補を重ねてきたが、世界情勢は大きく転換を遂げつつあり、貿易事情も様相を一変した。この際、新しい時代に即応して全面的に書き改めることが必要だと考えるようになった。

しかし、本書執筆の意図が旧版当時と全く変わったというのではない。実務論をふまえたミクロとマクロの総合としての貿易研究の試みとして生まれたのが、本書の旧版であった。最近の情勢はますますこのような研究の必要を裏書きしているように思われる。今や国際化の波動は、われわれの日常生活からあらゆる分野に行きわたっている。企業の貿易活動も単なる一企業の問題である以上に国際的関連を持ち、マクロの問題をはらんでおり、これを一貫した問題として理解することが必要になってきている。また石油ショック以来、それは世界の貿易関係から政治経済の流れにまで微妙な変化を与えてきた。アフガニスタン問題やポーランド情勢は東西のデタント体制にひび割れをもたらし兼ねない危険性をはらんでいるが、他面、「新国際経済秩序」

も一進一退ながら着実に地歩を固めて前進している。こうした情勢を展望しつつ、全編にわたり大幅に書き改めることとした。したがって、この新編は、文字通り改訂増補の域を越えた内容構成となっている。本書が少しでもこの新しい時代の要望にこたえ、多くの学徒の研究意慾を燃やすことに役立てば、この上の幸せはない。

終わりに、この新版の執筆をすすめられ、励ましをいただいた自由書房編集部長黒田邦夫氏に深く感謝するとともに俵力雄氏をはじめ、索引の作成や校正の労をとられた編集部の杉本良雄氏には心からの謝意を表したい。

1981年3月9日

町 田 実

は し が き

貿易論とは何かというとき、その問題のとりあげ方によって全く異なったものとなりうる。事実、貿易論は人によってさまざまな取扱いがなされている。

学ぶものの立場からみると、一つは商学的実務的な分野があり、他は経済学的な理論と政策に関する分野に分かれるであろう。前者が貿易取引の手續上の問題から契約・慣習にまつわる法解釈の問題にいたるまで複雑な体系を擁しているのに対し、経済学上の問題としての貿易論は、体系的に理論と政策を中心としてとりあげられ研究されることとなる。

実務上の対象としての貿易論にしても、細かく検討すると陸海空の交通運輸問題から、倉庫・港湾などに関連した問題や海上保険や外国為替の実務にいたるまで互いに関連しており、なんらかの一貫した順序による総括的・統一的な研究が必要とされる。

経済学の歴史にさかのぼると、経済学そのものが最初から貿易問題と深く結びついていたことに気づくのであって、外国貿易に関する理論は少なくとも政策のための理論であった。古典派経済学についてみても、政策論としての自由貿易か保護貿易かといった問題は、そのまま経済理論の対象でもあったのである。

今日では、国際管理通貨制度の下で諸国間の国際収支の調整が重大問題となるにしたがい、古典派の時代とは異なって、貿易問題を国際収支論の中に包含して国際経済論として論ずる立場や、政策上の問題を単に技術的な問題として切離して論ずる立場があらわれている。

いずれにせよ、こうした問題を科学的に研究するためには、その底に流れている本質をつかむことが必要であろう。私は別著で、このような立場から

貿易を社会経済的背景において歴史的にまず研究した。人間の合理的行為の出発点は「貿易」——異種族間の交易——から始まると考え、原初的形態での貿易問題から出発し、複雑な現在の貿易までの発展を概観したのであった。もちろん、このことは実務的關係についても言いうることを考える。

本書では、この歴史的視角を背景にして、実務的諸問題や政策技術的諸問題を取りあげ、その中心課題に迫るとともに貿易の将来を展望しようとした。理解をたすけるために、貿易理論と為替理論等の流れについてもふれ、国際貿易問題の高度な理解への道しるべとなれればと考えた。最初の導入部は日本の貿易の実態と位置づけから始め、終章では国際的展望において貿易の当面する問題についてできるだけふれたつもりである。一応初学者を対象として書いたので、ときに精緻さに欠ける部分もあろうが、その論旨においては十分問題点にふれることができたものと信じている。

貿易理論や政策問題を研究する場合でも、貿易の実際についての筋道の立った理解があって初めて深い研究に入ることができるのであって、実際を無視した研究は砂上の楼閣であり、空理空論のそしりをまぬかれないであろうことはいうまでもない。とくに、実践性が要求される貿易論においては、こうした実際の知識の上に立った体系化が望まれている。本書がこのような要望に少しでも役立つことができれば幸いである。

本書は自由書房編集部長黒田邦夫氏の熱心なすすめと編集部の俵力雄氏の忍耐強い励ましによって、ようやくこのような形に仕上げることができた。この間の両氏のご援助に深く感謝したい。なお索引の作成については、早稲田大学大学院商学研究科の塩浜秀夫、前田和実両君に負うところが多い。ここにあわせてお礼を申し上げたい。

1972年2月8日

町 田 実

目次

序章	1
第1節 貿易の意義	1
貿易の重要性 1 外国貿易と国際貿易 2	
貿易概念の変遷 2	
第2節 現代国際貿易の多面的性格	5
貿易現象の二重的性格 5 何のための貿易か 5	
貿易と国民的福祉と経済成長 6	
資本の国民性と国際性 7 多国籍企業の出現と貿易 8	
第3節 多角貿易の推進	9
貿易関係の多角化 9 戦前の多角貿易体制 10	
戦後世界の多角貿易体制 11	
第4節 世界貿易の構造と日本	13
1. 世界貿易の構造	13
世界貿易の発展 13 世界の地域別貿易構成とその推移 15	
世界市場における貿易の流れとその比重 17	
商品別構成からみた世界貿易 19	
2. 世界の中の日本貿易	23
戦前の日本貿易構造 23 戦後の日本貿易構造 26	
70年代以降の日本貿易 28	
第1章 貿易取引と決済機構	32
第1節 貿易取引の実際	32
1. 輸出貿易	32
A 輸出取引の成立	32
事前になすべきこと 32 輸出市場調査の必要性 33	
取引先の選定 35 輸出の引合と取引の基礎条件 35	
契約の成立 37	
B 輸出貿易の手続き	37
輸出貿易の管理方式 38 輸出の通関 40	
輸出貨物の船積み 41	
2. 輸入貿易	42

A	輸入契約の成立まで	42
	輸入業者 42 ファーム・ビッド 44 輸入契約 44	
B	輸入貿易の手続き	45
	輸入貿易の管理 46 輸入の通関 48	
第2節	商慣習と貿易契約の定型化	49
1.	海上貿易の発展と貿易契約の定型化	49
	多様な貿易慣習 49 国際海運の発展による慣習の変化 50	
	貿易慣行の定型化とインコタームズ 52	
2.	貿易契約の定型	54
	FOB条件 54 CIF条件 56 揚地渡し条件 57	
第3節	国際決済の仕組み	57
1.	貿易取引と決済	57
	貿易取引の特殊性 57 外国為替による代金決済 58	
2.	為替決済の方法	59
	いろいろな決済方式 59 外国為替のメカニズム 59	
	外国為替による資金移動の2方法 60	
3.	貿易決済のための諸手段	62
	外国為替の種類と形態 63 信用状と船積み書類 65	
4.	国際間の決済と資金関係	68
	為替決済と国際決済 68 国際貸借と国際収支 69	
第4節	外国為替相場	70
1.	外国為替市場と為替相場	70
	外国為替市場の成立 70 外国為替相場と両替相場 71	
	為替相場の建て方 71 外国為替相場の分類 72	
2.	外国為替相場の変動	75
	金本位制下の為替相場 76 管理通貨制と為替相場 77	
	為替相場の変動 77 戦後日本の為替相場 79	
	スミソニアンから変動相場制へ 80	
第2章	国際収支と貿易構造	82
第1節	国際取引の統計的把握	82
	その重要性と困難性 82 税関統計 83	
	輸出信用状統計 85 貿易指数 86	

第2節 国際収支の意味	87
国際収支の重要性 87 国際収支表 88	
居住者と非居住者 89 「対外経済取引」の内容と分類 90	
複式簿記の記入方式 92 国際収支の黒字と赤字 94	
第3節 国際収支の構造分析	96
国際収支の構造 96 国際収支の均衡 97	
国際収支不均衡の要因 98 貨幣所得の変化と国際収支 100	
インフレーションと国際収支 101 構造的な不均衡 103	
第4節 国際収支の調整	105
調整の必要性 105	
市場メカニズムによる調整と直接統制による調整 106	
金融財政上の措置 107	
第5節 最近の国際収支	108
1. 世界の国際収支構造	108
先進国の国際収支 109 開発途上国の国際収支構造 112	
世界の国際収支構造の変化 113	
2. 日本の国際収支の推移	114
戦前の国際収支 114 戦後復興期の国際収支 115	
外貨供給源としての輸出 117	
技術導入による輸出構造の変化 118 高度成長下の国際収支 121	
1970年代日本の国際収支構造の変化 125	
第3章 貿易政策とその制度上の諸問題	128
1. 貿易政策とは何か	128
貿易政策概念の変遷 128 貿易政策の概念 129	
2. 貿易政策の主体、目的、対象	130
貿易政策の主体 130 貿易政策の目的 131	
貿易政策の対象 131	
3. 通商条約と国家の役割	132
通商条約の意義 132 通商条約の時代的性格 133	
最恵国條款 134 最恵国條款の種類 134	
現代の最恵国待遇 136	

第1節 輸出貿易の制度と政策	137
1. 輸出政策の制度的基盤	137
輸出貿易の管理 137 輸出手続きの簡素化 138	
輸出入取引法に基づく諸制度 139 輸出組合 140	
輸出検査 140	
2. 輸出振興策の制度的基盤	141
輸出振興策の基盤 141 ジェトロの活動 142	
日本プラント協会 143	
3. 輸出奨励政策	143
輸出奨励金 143 輸出補償制 144 輸出保険 145	
デザイン振興 146 デザインの保全 147	
4. 輸出規制問題	148
輸出禁止 148 輸出自主規制 149 新たなる輸出規制 150	
5. ダンピング政策	151
ダンピングの定義 151 ダンピングの種類 152	
似て非なるダンピング 153	
第2節 輸入政策をめぐる諸問題	154
1. 輸入制限の諸形態	154
輸入制限の由来 154 輸入割当制 156 輸入許可制 157	
その他の貿易制限 159 第2次大戦後の為替管理 162	
日本の為替管理機構 163	
2. わが国輸入政策の課題	165
戦後輸入政策の基調 165 自由化と残存輸入制限 166	
輸入手続きの簡素化 166	
第3節 関税および関税政策	167
1. 関税の本質	167
関税の起源 167 関税の目的と機能 169	
2. 関税の種類	171
従価税と従量税 171 輸出税と通過税 174 差別関税 175	
国定関税, 協定関税, 便益関税 177	
3. 関税政策の意義	179
関税政策の推移 179 狭義の関税政策 180	
わが国の関税政策 181	

第4節 非関税障壁問題	182
1. 非関税障壁問題登場の背景	182
非関税障壁とは何か 182 貿易の自由化とその限界 183	
2. 主な非関税障壁と問題点	184

第4章 国際貿易および為替の理論189

第1節 重商主義の貿易観	189
1. 重商主義理論の特質とその内容	189
重金主義から重商主義へ 189 重商主義の貿易理論 191	
2. 重商主義理論の解体とその遺産	194
自動的正貨流出入機構についての認識 194	
ヒュームによる総括 197 重商主義理論の解体 199	
重商主義理論の遺産 199	
第2節 古典派貿易理論の体系	200
1. 資本主義の成立と外国貿易	200
アダム・スミスの貿易観 201 外国貿易の必要性 203	
2. 比較生産費説と国際分業	206
比較生産費説 206	
国際間における価値と価格変動のメカニズム 209	
リカード体系における国際分業の意義 211	
3. 交易条件	212
交易条件の概念 212 相互需要説 213 ミルの補説 215	
第3節 保護貿易主義の系譜	217
1. ハミルトンの保護貿易主義	219
2. F. リストの保護貿易主義	221
3. 保護貿易主義の後継者たち	231
ケアリー 231 R. シュラー 232	
第4節 新古典学派の貿易理論	237
1. 比較生産費説の新展開	237
生産費の概念 237 タウシグの理論 238	
2. 交易条件論	242
マーシャルの供給曲線 242	

第5節 近代理論の展開	245
1. 序説	245
近代理論成立の背景	245
2. 近代理論の分析用具	246
機会費用 246 無差別曲線 248	
3. ヘクシャー・ウリーン理論	249
要素賦存 250 貿易と所得配分 251 その後の研究 253	
第6節 貿易理論と外国為替の理論	254
1. 古典的為替学説	255
国際貸借説 255 購買力平價説 257 為替心理説 259	
2. 近代理論における為替論	261
近代理論の為替観 261 為替安定性の理論 262	
第5章 戦後国際貿易の展開とその課題	264
第1節 バックス・アメリカナと国際経済機構の整備	264
1. バックス・アメリカナの成立	264
世界貿易におけるアメリカの優位 264 膨大な生産能力 265	
金保有の増大と膨大な海外投資 265	
バックス・アメリカナの成立 266	
2. IMF・GATT体制	267
アメリカ通商政策の転換 267	
アメリカ体制としての組織化 268 GATT体制 269	
IMFと国際通貨体制 270	
第2節 国際貿易の組織的展開	272
1. 自由化とその行方	272
自由化の意味するもの 272 自由化の推進 273	
EECの結成 274 通商拡大法とケネディ・ラウンド 276	
拡大ECの成立 278 拡大ECの問題点 279	
2. 企業の国際化	280
新しい資本輸出 280 資本と生産の国際化 282	
多国籍企業のイメージ 283 多国籍企業と国家 286	
企業の国際化と企業内分業 287	

第3節 戦後資本主義貿易の拡大とその矛盾	288
1. 戦後国際貿易の拡大とその要因	289
戦後復興期の貿易拡大とその特色	289
工業発展と貿易の拡大 290 世界貿易拡大の直接的要因 292	
高度成長経済と国際貿易の拡大 292	
2. パックス・アメリカナの崩壊と国際貿易の混乱	294
パックス・アメリカナの崩壊 294 国際貿易の混乱 297	
第4節 第三世界の登場とその展開	300
1. 資本主義世界市場と開発途上国	300
植民地からの脱却 300 その経済的地位 300	
戦後の貿易 301 外貨危機と援助 305	
2. 開発途上国の自立的発展のために	306
南北問題 306 UNCTAD 308	
UNCTADの組織とその活動 310 一次産品問題 311	
国際商品協定と価格安定メカニズム 312 一般特惠関税 313	
新たな世界市場の組織化 314	
第5節 社会主義貿易と東西貿易	316
1. 戦後社会主義貿易の前進	316
複数社会主義の時代 316 戦後のソ連貿易 317	
ソ連貿易の商品構成 318 市場別貿易構成 319	
東欧諸国の貿易 321 中国およびアジア社会主義国の貿易 322	
2. 社会主義貿易の特色	325
社会主義貿易の原則 325 貿易の国家独占 327	
貿易独占の基本原則 328	
3. 社会主義的国际分業と東西貿易の進展	330
社会主義的国际分業の前提 330	
社会主義国际分業の基本原則 331 東西貿易 334	
東西貿易の貿易構造 334 東西貿易の経済的抑制要因 336	
東西貿易か社会主義国际分業か 337	
第6節 新国際経済秩序への胎動	338
1. 南北問題の新展開	338
南北間格差の拡大 338 累積債務の増大 339	
自立のための要求へ 340	

2. 新国際経済秩序の要求	341
新国際経済秩序出現の歴史的背景	341
新国際経済秩序の要求 343 新国際経済秩序確立の宣言 344	
その後の動向	347
3. 先進諸国の対応	349
一次産品問題をめぐって 349 ロメ協定 351	
東京ラウンド 352 東京ラウンドの成果と問題点 354	
その評価と課題	356
4. 脱イデオロギーの体制変革	357
誰のための新秩序か 357 ローマ・クラブの提言 359	
脱イデオロギーの体制変革の道	362
国際貿易の研究を続ける人のために（参考文献解題）	368
さくいん	382

序 章

第1節 貿易の意義

貿易の重要性

現在、貿易なしに自給自足の経済を営んでいる国はないし、そのような孤立した国を考えるとすら困難である。どんな国でも、工業、商業、技術そしてその生活水準は、貿易と金融の複雑に交錯した網の目を通じて他国の経済と関連している。試みに朝食のときの味噌汁にしても、その原料である大豆や塩は輸入品であり、パン食をする人は、アメリカ産の小麦粉やブラジルのコーヒーの世話になり、甘味の砂糖はキューバから輸入しているのである。衣料品の原料にしても、ウールの洋服はオーストラリア産の羊毛であったり、木綿の肌着はアメリカ産であり、もし化繊であれば、中近東から輸入した石油が原料であったりといった具合である。住宅にしても、木材はもとより鉄材も合板の原料もその多くが、外国から輸入されているのである。衣食住にしてしかり、とくに日本の場合は、原料、資源にとばしい島国であるから、外国原産の原材料や商品に依存する度合いはきわめて大きい。

われわれの日常生活が諸外国と深くかかわっているということは、現在のように経済の発達した時代には、経済のすべてが国際的に深い関連性を持たざるを得なくなっていることを意味する。それは、必ずしも直接的な関連があるとは限らないかもしれない。一見関連性のないように見える分野でも、経済の網の目の中では、時に受動的な形で関連せざるを得ないというのが、当今の経済社会なのである。

ところで、世界の人びとを経済的に結びつけるものこそは貿易であり、こ

それを媒介するのが運輸・交通機関や通信機関なのである。最近の日本についてみると、1979年にわが国に入港した貿易船は日に112隻、貨物航空機は日に128便に上り、国民一人当たり5.2トンの貨物が海外から運ばれた。また情報の相互交流も年々拡大し、78年度に日本が海外に発信した外国郵便物や国際電話、電報、テレックスは1億2,500万通、逆に外国からの受信は1億4,400万通に達しているのである（『通商白書』1980年版）。もちろん、現代の貿易を可能にしているのは、こうした運輸・交通・通信といった技術的手段にとどまらない。あとで詳しくふれるように、国際的な銀行のシステムや保険業の発達による国際的信用制度の確立が大きな支えとなっていることはいうまでもない。

外国貿易と国際貿易

一般に外国貿易（Foreign trade）というとき、狭義には政府あるいは個別企業が国境をこえて行う商品取引をさしている。しかし国際間には、商品取引以外にも海上輸送や保険その他のサービスや資本の取引のように、目に見えない経済取引も存在している。したがって、広義にはこれらを含めて外国貿易あるいは国際貿易（International trade）という場合がある。外国貿易は、国を異にする取引であるところから、一国内で行われる国内商業と対照され、一国を主体とした他国との貿易という観点が強調されるのに対し、同じ貿易現象でも国際貿易というときは、ニュアンスにおいて異なり、これを第三者の立場から客観的に見るという見方を表明している。前者は、たとえば日本の立場から対外商業活動を見る場合に使われ、対外貿易とか対米貿易とかいう表現と同じ意味合いであるが、後者は、特定の国の立場からではなく、諸国間における貿易現象を観察するので、国家を意識する立場から、社会経済現象として純化して見る立場まで、見方にはいろいろありうる。

貿易概念の変遷

異種族あるいは生活圏を異にする地域間での交換関係をもって貿易の原形であるとすれば、貿易は歴史の初期に